

書評

永田知之著

『理論と批評——古典中國の文學思潮』

和田 英 信

お茶の水女子大學

古典中國における文學とは何かについて、清々しいまでに真正面から取り組んだ書。しかもその敘述方法はなかなか戦略的である。

まず全體の構成が組織立てられている。本書は第一部「繼承と變容」、第二部「言説の系譜」という二部構成。第一部では、文學理論・批評に關する基本的情報がその歴史の展開を逐つて概述される。三章からなり、第二章の『文心雕龍』『詩品』を中心にすえ、それ以前と以後という構成が意識されているようだ。そして第二部では、理

論・批評をめぐる様々なトピックスが示される。こちらは四つの章からなり、文學論の形式や媒體、文學と文學論の關係、言語表現の可能性、古典文學の終焉についてなど、多角的な視點から文學と文學論に關する問題が提示される。中國の文學理論・批評に關する情報、縱軸と横軸が織りなす網の目のなかに文字通り網羅されるという構成だ。

理論・批評への言及が自ずと中心ではあるが、各時代を代表する作者や實作への配慮も備わっている。またこのことによって、本書の主旨である文學思潮の歴史的發展を示すことを實現しながら、文學そのものの歴史についても、おおよその情報が讀者に示されるように構造化されている。全體の構成とともに、細部にも相當の意が用いられている。たとえば冒頭の「はじめに」では、まず敦煌寫本『文心雕龍』の「徵聖」篇の圖版が示される。文彩をともしなう言語表現によつて聖賢の教えが今に傳わつたと述べる「徵聖」篇の内容から、道德や倫理といった儒教的價值觀と切り離せない中國の文學論の本源的特質を示す。一方、その同じ寫本の餘白に書き込まれた落書きめいた手習

いの跡に目を留め、こうした理念に發する言説のすぐ傍らに、きわめて實用的な技法論が存在したこと、すなわち中國の文學理論の二面性が述べられる。圖版によつて視覺に訴えつつ、中國の文學論の中心に切り込む。

また「はじめに」では、本書に用いる「理論」と「批評」を初め、用語等が明確に定義される。「〈文學〉をめぐる、個別の作品や書き手に必ずしも對象を限らない諸言説を〈理論〉とよぶこととする」。そして、「〈理論〉による價值基準を用いて、ある作品・作者・流派などのどの點が、いかなる意味で優れる（または劣る）のか、それを斷じることが〈批評〉と考えられよう」。この「理論」と「批評」を一括する呼稱として「思潮」がとられる。

ついで、「理論」と「批評」を考察する材料をどのように見いだすかについて述べる。著者は、程千帆「古典詩歌描寫與結構中的一與多」を踏まえ、その手立てに「二つの道筋」があるとする。一つは『文心雕龍』などの理論・批評を主題とする文獻・作品を考察する「古代的文學理論」の研究。いまひとつは、實作の検討などを通して文學性の

ありかたを考察する「古代文學的理論」の研究。本書の論述はもちろん前者が中心を占めることになるが、同時に理論・批評が個別の作品においてどのように反映しているかに注意したという。

時間的射程としては、古典中國語（日本でいう「漢文」）が書き言葉の規範とされた二十世紀前期までという意味を「古典中國」という語に擔わせる。かくて本書のタイトル『理論と批評―古典中國の文學思潮』が確定する。書名に即して用語の定義が用意されることによって、本書の課題はきわめて明確となる。

著者には、すでに『唐代の文學理論―「復古」と「創新」』（京都大學學術出版會、二〇一五年）があり、文學思潮の中における陳子昂像の變遷、皎然『詩式』、『吟窗雜錄』等が中心的な課題として論じられている。これが著者の先鋭な問題意識に基づく個別研究であるとするならば、本書は文論をめぐる研究領域の全體像を包括するもので、二つの著述は重なる部分を持ちながらも、それぞれに特色あるものとなっている。

本書は京大人文研東方學叢書の一冊であり、「研究成果を一般にわかりやすく還元することを」目的として刊行されたもの。こうした一般讀者層を意識した配慮も十分に成されている。たとえば引用文はすべて現代語譯で示され、人名や事項を擧げる際、それが他の項目に見える場合には努めてそれを注記する。項目間の敘述につながりを持たせ、見慣れない語に違和感を覺えないようにとの用意であろう。作品の實例を擧げる際にも、既述事項に關連のあるものを引くように意識していると思われる。幅広い讀者を對象とした著述は、情報の選擇や敘述の方法に關して、むづかしい舵取りを求められるものと思うが、著者はそれを見事にこなしている。

目次は以下の通り。本書の目次には示されないが、本文中にゴチックで置かれる見出しをここでは括弧内に示しておく。

第一部 繼承と變容

第一章 文學論の興起

第一節 「文學」の萌芽（「文學」以前、「詩言志」説）
第二節 解釋の可能性（「以意逆志」「知人論世」、發憤著書）

第三節 文學独自の理論の發生（文學自覺の時代、文學論が多樣化した背景）

第二章 文學論の發展

第一節 『文心雕龍』の體系性（『文心雕龍』前半部の概略、『文心雕龍』後半部の概略）

第二節 『詩品』の詩歌批評（『詩品』の概略、『詩品』の批評法）

第三節 文學理論・批評書登場の背景（既存の文學作品・文學論からの影響、「文學自覺の時代」が行きついた場所）

第三章 文學論の展開

第一節 唐代（傳統の繼承と變容、古への道、諷喻・閑適と中隱）

第二節 宋代（殆ど窮する者にして後工み也、「載道」説、夫れ詩には別材有り）

第三節 元代（新しい文體とその理論化、居と遇）

第四節 明代（古文辭とその波紋、眞詩）

第五節 清代（義理・考據・詞章、神韻・格調・性靈）

第二部 言説の系譜

第四章 文學論の媒體

第一節 文學を論じる様式（體系的な理論の乏しき、文學

思潮を知る材料）

第二節 選集（選集から知る文學觀、理論の媒體としての選

集）

第三節 摘句（摘句と秀句集、摘句の限界）

第四節 詩格（作詩の手引き、詩格の特徴と「死法」への批

判）

第五節 論詩詩（「戯れに爲る 六絶句」、詩で詩を論じるこ

と）

第六節 詩話（詩話の登場と題材、詩を散文で論じること）

第七節 評點（評と點、評點が普及した要因）

第八節 技法論との關わり（媒體が持つ方向性、様式が發

達した意味）

第五章 文學論の占める位置

書 評

第一節 創作と批評・理論（實作の才能と批評・理論、實

作と理論・批評の不均衡）

第二節 文學批評・理論と圖書分類（獨立した分類の登場

以前、「文史」の登場、學術の領域としての定着）

第三節 「文學」の位置（「士」における「文學」、「士」に

「文學」が缺かせない理由）

第四節 批評の可能性（批評・理解への疑念、「作詩」と

「評詩」）

第六章 言葉による表現の可能性

第一節 言語表現の範圍（言は意を盡くさず、意を得て言

を忘る）

第二節 象徴化と言語（言・象・意、辯ぜんと言を

忘る）

第三節 言葉を越えた存在（意象、象外の象、言葉の力）

第七章 傳統の總括をめぐって

第一節 古典文學であることの條件（文言の使用、「古

え」への尊重、傳統の否定）

第二節 「古典」と「近代」の間（小説評論と詞話、一代

には一代の文學有り、「文學」は「死」んだのか

参考文献一覽／あとがき

圖版出典一覽／索引

第一部「繼承と變容」では、文學思潮の流れを概観する。

第一章「文學論の興起」の第一節「文學」の萌芽では、古代における「文學」の概念について確認する。まず

「文學」の語が literature の譯語として用いられるようになるのが二十世紀以降であること、そして古代にあつては現在の literature に相當する「文」「文學」の概念が希薄であつたことを述べる。次に「文學」に相當する最古のテクストとして『詩經』の存在を指摘し、鄭風の「將仲子」と「褰裳」の二篇を引く。また、『詩經』大序の一節「詩者志之所之也、……移風俗」や『書經』舜典の「詩言志、……律和聲」（いずれも本書では現代語譯で示される）を踏まえ、人の内面の心の動きが表に現れるところに「詩」發生の契機を認める考え方に言及し、これを「詩言志」説とする。そして「將仲子」と「褰裳」の毛傳を例に挙げつつ、

詩の解釋にしばしば政治や社會狀況などに關する寓意を介在させる一方、男女の戀愛感情を讀み取ることが忌避されることを説明する。中國における「文學」と文學論の發生について、必要な情報・事項が適確に紹介されると同時に、實際の作品を引くことによって、理論・批評の文學の場における機能が具體的に示される。これは、この章節だけではなく本書全體の特色といえる。

なおこの「將仲子」と「褰裳」は、本書の中ではこの後も何度か顔を見せる。たとえば第三章第二節「宋代」では、同じ詩篇を用いて朱熹『詩集傳』における『詩經』解釋の轉換を説き、また第四節「明代」においては、馮夢龍『山歌』を紹介する際、男女の戀愛をうたう作品とそれをめぐる解釋・評價の歴史的變遷を示す例として參照される。ここにも著者の工夫・配慮が存すると思う。

第二節「解釋の可能性」では、『孟子』「萬章」上の一節を引きつつ、讀者は自己の考えをもとに作者の思いを推し量ることができるとする「以意逆志」の考えと、書き手に關する情報とその時代背景を知ることにより作品の正確な

解釋は可能とする「知人論世」(『孟子』「萬章」下)の考え方が芽生えたことをいう。また、作り手の側の著作の動機・契機として「發憤著書」説が説かれるが、司馬遷の擧げる著述が、經書・諸子・史書であり、古典中國における文學では必ずしもなかった點に注意する。

一方、漢代、「文學」の領域の獨立の兆しが見られることを、『漢書』藝文志(七略)における詩賦略の存在に目をとめて語る。その詩賦略に位置づけられる作品の多くを辭賦が占めることから、例として「離騷」の一節を擧げ、『楚辭』に關する基本情報を提示。續けて賈誼「弔屈原賦」、司馬相如「上林賦」の一部を引きつつ内容の概要を説き、辭賦の表現の特色にも言及する。そのうえで、漢代の辭賦の雕琢への過度の志向、結果としての美文の盛行が、次の時代の文學論を用意したという。

第三節「文學獨自の理論の發生」、時代は降つて後漢も滅び、三國・魏となる。ここでは曹丕「典論・論文」(「文章は經國の大業、不朽の盛事」)の出現の意義が中心に説かれる。文學の價值が高らかに宣言される、その背景を曹植

「公讎詩」も引いて確認する。一つには五言詩の定立・發展、文學に參與する者の地位の向上、集團による創作が批評の生まれる土壌となること、それらが「支那の文學上の自覺時代」(鈴木虎雄『支那詩論史』)、「文學的自覺時代」(魯迅『魏晉風度及文章與藥及酒之關係』)と稱される基礎となる、という。

本節では他に西晉・陸機「文賦」に言及する。その「詩は情に緣りて綺麗」ということばについて、これを「詩言志」説の枠内にあるとする考えと、感情の表出と表現への志向を表すとする考え(いわゆる「(詩)緣情」説)の間の解釋の搖らぎを示しつつ、そこに文學表現に對する思考の多樣化の一斑を見いだす。さらにかかる多樣化の背景として、爭亂が續き社會が不安定となつて、儒家の價值觀に基づく道德・倫理を振りかざすだけでは秩序が維持できなくなつたこと、そこに「道德の思想を鼓吹する手段」から離れて「文學は其れ自身に價值を有するものなりとの思想」(鈴木)が生まれる可能性が芽生えたことを述べる。

本節もまた他の章節と同様に行き届いた論述であると思

う。あえて希望を述べるならば、この時期の大きな問題として「作者」の成立、あるいは「作品」における「作者」の署名に關する著者の考えを讀みたかった。本書にも「曹植や曹丕、彼らをめぐる知識人が名前を明示して五言詩を盛んに作るということは、前例のない事態であつた」とあるが、詩型のバリエーションの展開を説く中にやや埋没してしまつたようだ。この問題は、表現の場における詩の位置づけの大きな轉換を示すものであり、また「文學の自覺」とも大きな關わりを有するであらう。

第二章「文學論の發展」は、いよいよ中國の文論史の畫期をなす著述、『文心雕龍』と『詩品』を取り上げる。第一節は『文心雕龍』の體系性。まずは『文心雕龍』全書の構成について。十卷五十篇が二十五篇ずつ前後に二分されること、前半の冒頭五篇（「原道」「徵聖」「宗經」「正緯」「辨騷」）が文學原論で、のこる二十篇が文體・ジャンル論、うち前の十篇が押韻する文體、後の十篇が押韻しない文體であること、が示される。内容については、とくに前半冒頭の五篇の内容を踏まえたうえ、ジャンル論のうち明詩篇

に紙幅を費やす。これが「古典における定義・語源からする考察」「代表的な作者・作品を評した上でのジャンルの歴史に關する回顧」「以上の考察を通した總括、創作法の要諦」という三段構成をとることを指摘しつつ、こうした構成がさまざまな文體を語る他の各篇に共通することを述べる。また、文學における諸問題を論じる後半二十五篇も、その多くの篇で「課題の提起、概念の定義」「歷代の關連する事象」「問題の解決法、理想的な在り方への論及」という共通する三段構成をとるといふ。以下、文學に關する諸問題を論じる「神思」「體性」「風骨」「通變」「定勢」「情采」「鎔裁」「聲律」「章句」「麗辭」「比興」「夸飾」「事類」「練字」「隱秀」「指瑕」「養氣」「附會」「總術」「時序」「物色」「才略」「知音」「程器」「序志」の一つ一つについて、その梗概が示される。

『詩品』についても『文心雕龍』と同様、その構造に着目する。まずは詩人に對する評價が「上品」「中品」「下品」の三段階に評價されていること。またそれぞれの詩人の品評の構成が、「源流となる作品・詩人の提示」「詩風の

批評」「詩句の摘録」「總括めいた評語」からなることをいう。そしてその具體例として挙げられるのが、「中品」の陶淵明。ここで陶淵明が選ばれているところにも、著者の工夫がうかがわれる。「中品」という陶淵明に對する評價が、當時の一般的なそれに引き比べて相當高く、きわめて先驅的なものであったこと、その前提として當時（すなわち南朝後期）の文學の場が、貴族の子弟にとって有利な環境であり、往々にして修辭過剰の傾向が強かったこと、さらにはそうした風潮に對して鍾嶸が批判的であつたことなどを述べる。陶淵明という一般にもよく知られた詩人を取り上げつつ、當時の文學環境、陶淵明評價、著者鍾嶸の文學觀などを同時に語るわけである。

次の節『詩品』の批評法』ではさらに細かく批評方法の特質が述べられる。ここでは、詩人の源流が「國風」に發するものと『楚辭』に發するもののいずれかに分けられること、鍾嶸は「國風」に詩の理想を認める一方、『楚辭』の流れを汲むとされる詩人については、その修辭への傾斜に對して批判的であつたことが指摘される。そして詩

人の詩風形成に歴史的な流れをみるこうした發想を、本書は「推源遡流」と稱する。

また『詩品』の詩評のもう一つの特色として、たとえば謝靈運について、「ちようど青々した松が低木から拔きん出て、白い玉が塵や砂に交じつて輝くようなもので、（繁多も）その氣高い清らかさを減じることとはできないのである」といったような比喩表現がしばしば用いられることを述べ、これを「意象批評」と稱する。そしてこうした批評方法が、のちの文學批評において普遍的になつていくことを指摘する。

本書がこのように『文心雕龍』と『詩品』に紙幅を割くのは、その理論・批評史上の位置を思えばごく自然なことではあるが、著者の意圖をもう少し推し量るならば、たとえば『文心雕龍』後半二十五篇の内容を各篇ごとに紹介するのは、その構成面での體系性を見ると同時に、ここに古典中國における文學理論面での問題意識が網羅されているためであろう。讀者はこれによって文學をめぐる問題の總體を概観することができる。また『詩品』については、そ

の批評のあり方が發想・方法の兩面で、これ以降の批評著作の典型をなすものだからであろう。とまれ讀者は中國文論を代表する著作について、的確な要約によつてその概要を知ることができる。

第三節は節の題目の通り、「文學理論・批評書登場の背景」について。相當數の文學者の輩出、作品の量的蓄積がこうした理論・批評形成の土壤となつたこと。また『文心雕龍』『詩品』以前に理論・批評に關わる論著が少なからず作られ、兩書に影響を與えたであろうこと。たとえば『文心雕龍』が多くの紙幅を割く文體論には、「典論・論文」「文賦」の影響が想定されることを述べ、また兩書における「氣」の重視については、その先驅として曹丕の文章にしばしば見える「氣」への言及を指摘する。一方當時の既存の思潮、たとえば典故の多用、音韻の洗練の過剰な重視への反發が、鍾嶸の著述の背景にあつたことにも注意を喚起する。

以下、本書では『文心雕龍』本文そのものにおける緻密な對偶表現と、それにとまなう音調面の配慮を具體的に示

す。これらは鍾嶸と立場を異にする一面を示すものだが、同時に劉勰にも當時の文學をめぐる現状への不滿があつたことを述べる。

『文心雕龍』『詩品』以降を語る第三章「文學論の展開」は、節を五つに分ち、唐・宋・元・明・清、各時代の文學思潮を見ていく。

第一節「唐代」では、まず杜甫「天末に李白を懷う」詩を例にとり、平仄・押韻・對偶などの五言律詩の決まりを示す。次いで内容に目を轉じ、詩における典故活用 of 具體例を擧げる。とくにその五句「文章は命の達するを憎む」に目をとめて、「發憤著書」や「賢人失志」など、文學者の命運を語ることとそその系譜に言及する。一篇の詩を材料に、唐代に定立した詩の韻律を説明しつつ、文學論の展開をも同時に示す、著者の手際は鮮やかだ。

續いては中唐の韓愈と白居易を取り上げ、前者の古文復興運動、後者の諷諭・閑適とその思想的背景をなす兼濟・獨善の思考を説き、さらに官員としての理想の生活をうたう「中隱」に言及する。またここに、個人生活を詩にうた

う在り方の先驅とその理論的支柱を指摘する。

第二節「宋代」は、歐陽脩による科擧の改革と、駢文から古文へという表現の中核をなす文體の變化、そして親友である梅堯臣の詩と運命に寄せたことは「殆ど窮する者にして後工み也」に目をとめ、前節の杜甫のことばからの繼承と展開を読み取る。この他、周敦頤による「載道說」の興起、朱熹による新しい『詩經』學、とくに寓意を前提としない『詩經』解釋が現れたことの意義を確認する。

また嚴羽『滄浪詩話』の、詩を詩たらしめるものには「書」や「理」とは關わらない「材」があるという主張に觸れる。そこでは過去の文論、『文心雕龍』や『詩品』の思想との關連、あるいは宋代の文壇における思潮趨勢（具體的には江西詩派）に對する批判意識、さらには朱熹や當時の道學者の思潮との關わりの可能性などにも目を配る。

第三節「元代」では、文學表現の様式の多樣化に言及。

詞・曲などの隆盛にともない、これらを論じる著述が生まれたことを述べる。この他、陳繹曾を取り上げ、作者の身を置く環境とそこに生み出される文學との關わりについて、

「居」「遇」という語に着目する。さらに陳の文章作法を論じた著述『文筌』とその朝鮮や日本における影響を、文學思潮の國際的な傳播の一例として紹介する。

第四節「明代」では、高棟による唐詩四分說（初唐・盛唐・中唐・晚唐）、唐詩區分の先驅となる嚴羽の考えに觸れながら、唐詩と宋詩のそれぞれの性格、そして後世の詩人たちが唐宋のいずれを選び學ぶのかという問題が述べられる。そのなかで、より古い時代の文學を重視する傾向が詩のみならず文章にも廣がり、明代中期以降、「古文辭」の考えが浸透したこと、その背景に文學の攜わる人々が増加したことが指摘される。

また印刷の盛行にともない戲曲・白話小説なども刊行されるようになったこと、またそれに關する理論・批評も盛んに行われたことを述べた上、時に露骨な性愛表現を含む民間の歌謠にまで知識人の關心が寄せられたこと、新しい表現領域に對する關心のもちようと先述の古文辭への反發との關連についても言及する。一方、古文辭派の一人李夢陽が民間歌謠の眞率な表現に關心と共感を寄せていたこと

にも目配りを忘れない。こうした事象も含めて、「詩言志」説や「載道」説からの大きな變化が明代の文學思潮を覆っていたことを強調する。やがて十七世紀に入ると古文辭派に對する批判も高まり、公安派・竟陵派が現れるが、その一人袁宏道の句「當代 文字無し、閭巷に眞詩在り」を挙げ、傳統士大夫の作爲的表現を免れた民間の眞率な表現に學ぶ姿勢をそこに見る。

第五節「清代」。朱子學の權威が高まり、體制維持にふさわしい儒教倫理の締め付けが強まったため、文學思潮も傳統的なものに回歸。詩文等の傳統的な文學と戯曲・白話小説などの非正統的文學に對する評價に歴然とした格差の現れたものとして、『四庫全書』の編纂を取り上げる。十八世紀以降、文章の流派として大きな力をもった桐城派については、その主たる指導者の一人姚鼐らの、思想（義理）・學問（考證）「考據」・表現（文章）「辭章」を兼ね學ぶべきとする主張に觸れる。

次いでいわゆる清代の三詩説。「神韻」については、主唱者の王士禛の餘韻と朦朧たる詩情を重視する姿勢が嚴羽

『滄浪詩話』に由來することを述べるとともに、「書」「學」を否定する嚴羽と、詩語・典故の洗練を重んじる王との距離にも目を配る。「格調」の沈德潛については、アンソロジーの編纂や批評を通じて力を發揮したこと。「性靈」の袁枚が詩の擔い手として幅廣い階層の人々に目を向けたことに注意を喚起する。

これらの記述に續く箇所、小説・戯曲といった非正統的文學と傳統詩文との關わりをめぐる議論もなかなか興味深い。三國・龐統を引う王士禛の詩題に演義中の虚構の地名が見えることや、詩に『牡丹亭』の表現を用いたことを非難する王應奎、これに對し、その地名や表現が演義や『牡丹亭』以前に見えることを挙げて擁護する張宗樞。また同様の事例として、崔謨や何焯が『三國志演義』にみえるストーリーを詩文の典故に用いたことを咎める袁枚『隨園詩話』。こうした傳統詩文の枠組みを守ろうとする根強い思潮と、雅俗の混交の浸透という止めがたい現象の両面に目をとめて、「古典中國」の文學思潮の流れを追う本書の第一部は結ばれる。

以下、第二部「言説の系譜」について見ていこう。本書の前半、第一部が文學思潮の歴史的變遷を先秦から清代に到るまで概観するのに對し、第二部「言説の系譜」は、文學理論や批評がどのような表現形式によって行われたのか、創作と理論・批評との關わり、言語表現の可能性、そして終焉を迎える古典中國と文學の可能性など、文學思潮をめぐるさまざまな問題が紹介され、筆者の考えが披露される。

第一節「文學を論じる様式」では、中國では古來、體系的な文論書が乏しいことをあらためて確認し、そのうえで文學思潮を読み取るべきテキストには多様な形式が存したことに觸れる。以下、張伯偉『中國古代文學批評方法研究』に基づきつつ、「選集（張氏の書では「選本」）」「摘句」「詩格」「論詩詩」「詩話」「評點」という文學理論・批評を入れる器ごとに、文學思潮と媒體をめぐる諸問題を論じる。

第二節「選集」は、アンソロジーの歴史とそこに見られる文學思潮の着目すべき點について。記録に名に見える最古のものとして西晉・摯虞『文章流別集』を取り上げ、

その編纂の背景に文學作品の量的蓄積をみる。次に『文選』については、『文心雕龍』との關わり、ジャンルの多様化、作品配列に見られる文體に對する評價、そして「文學」の範疇をめぐる意識などが述べられる。この他いくつかの選集を挙げつつ、その背景に存する文學觀との關わりを説く。梁・徐陵『玉臺新詠』と「艷詩」への嗜好、明・李攀龍『古今詩刪』、『唐詩選』と古文辭派、古文辭派に反發した竟陵派と『古詩歸』『唐詩歸』、清代では王士禛の『唐賢三昧集』、沈德潛の『古詩源』『唐詩別裁集』『明詩別裁集』『國朝詩別裁集』、姚鼐の『古文辭類纂』を挙げ、それぞれ編者の文學觀を反映するものとして選集が編まれたことをいう。

作品選擇のあり方に編者の文學觀をみるという視點は、批評媒體としての選集に對するアプローチとしては最も穩當なものであろう。ただ本書でも『文選』に關して、選擇される文體の分量と配列に着目し、ジャンルの位置づけの輕重に言及するが、こうした選集の編集スタイルについても、さらなる考究の餘地があると思われる。たとえば南宋

の詩の選集、方回『瀛奎律髓』と周弼『三體詩』は、いずれも近體のみを収載する。同時に前者は詩の主題によって、後者は詩型と句の構成法に基づいて収載作品を分類し配列する。これらはいずれも當時の新しい詩の享受者層の需要に應じた編集であろう。何を選ぶかと同時に、如何に載せるかについても、その選集の生まれた文學環境のあり方が映し出されているように思う。

第三節「摘句」は、文學表現の一部を抜き出す行爲。當該表現への評價を含むとすれば秀句・佳句と換言されるもの。本書は、『南齊書』「文學傳」の記述から南朝において摘句によって文學者を評價したものが存在したことに言及し、續く唐代では元兢『古今詩人秀句』、日本に目を移して『千載佳句』『和漢朗詠集』などを挙げる。また引き續いて、作品の一部のみを見て作品を評價することへの疑問の存したことなど、摘句という批評形式の限界についても述べる。

第四節「詩格」は、聲律などを含めた詩作技法の手引きで、多くは實例を擧げて作法と禁忌を具體的に示してくれ

る。こうした具體性はもちろん初學者を對象とするためであり、それゆえ文學論の中でもやや低く評價されることが多いのだが、本書は詩格の中にも抽象的な理論が見いだされることに注意する。たとえば具體的な事物を再現する「外意」と、そこに込められる象徴的な意味「内意」、その「外意」と「内意」がそろって詩は詩たろうという一節を『金鍼詩格』『續金鍼詩格』から引き、後世の詩歌論に相應の影響を與えたであろうという。またいささか窮屈なまでの技法論が「死法」と非難されつつも、こうした具體的な詩作作法を説く初學者向け指南書が編まれ續けたことを述べる。

第五節「論詩詩」については、杜甫「戲に爲る 六絶句」によって切り開かれた七言絶句による論詩詩について。杜甫の作のほか、金・元好問の「論詩絶句三十首」を擧げ、詩で詩を論じることの意味を考える。張伯偉氏の書は主に論詩詩の歴史的變遷に紙幅を費やすが、本書は七絶という容量の小ささ、および詩がそもそも持つ散文とは異なる象徴性に目をとめ、それゆえに避けがたい主旨の曖昧さとい

う批評媒體としての特質を説く。著者はいう、「(論詩詩が) 多様な解釋を許容する點が、逆に好まれた可能性が想像される。元來が象徴の手法に基づく詩について論じるのに、詩以上に適切な形式はないという考えも成り立つであろう。杜甫と王士禛は、いずれも表題に〈戲〉の文字が見える論詩詩を著している。そこには詩歌を論じることへの含羞や謙遜と同時に、言葉を曖昧な段階に止める姿勢が見て取れる。斷言を避けた場合、詩は格好の表現様式となる」。論詩詩という批評の方法をとる、その選擇の機微に關する著者のこうした解釋はとても興味深い。創作と批評を同時に擔う論詩詩という表現の器については、さまざまな角度からの考究があり得るだろう。本書の言及はその端緒となると思う。

第六節「詩話」では、歐陽脩『詩話』、司馬光『續詩話』以來の詩話隆盛の流れを踏まえつつ、詩話という批評表現の是非をめぐる議論を紹介する。隨筆(散文)で詩を語るといふ詩話の本質的性格に根ざして、しばしば事實と詩にうたわれる内容の一致・不一致に關する議論が詩話に

見られることを、唐・張繼「楓橋夜泊」のいわゆる「半夜鐘」をめぐる論争を取り上げ、事實にとらわれて詩情の本質を見失う愚を説いた明・胡應麟(詩數)や清・袁枚(隨園詩話)のことを紹介する。しかしながら詩話を否定する議論が、取りも直さず詩話の中において展開されていることに注意を喚起し、詩話という媒體が生み出した文學思潮の多彩さを述べる。なお「半夜鐘」をめぐる問題については、本書が參考文獻として舉げる松本肇「半夜鐘」(唐宋の文學、創文社、二〇〇〇年)の書評として著された川合康三「〈半夜鐘〉——詩觀の變遷——」(中國文學報)六二、二〇〇一年)の考察が參考になる。

第七節「評點」では、南宋・呂祖謙『古文關鍵』、眞德秀『文章正宗』など評點を附した選集の代表的なものを舉げ、劉辰翁が評點を附した『唐李長吉歌詩』を例としてその實際を示す。そのうえで、作品の背景や字義・語義・典故などを説く注釋に對し、自由な見解や讀みが示される評點の批評媒體としての可能性に觸れる。また、明・徐師曾『文體明辯』に評點の方法(圈點・傍線など)に關する解説

があることに着目し、こうした評點が初學者向けに廣く浸透していただろうという。また評點が實際の作品に付されるものという特性上、必ず評點には實作をとまなうこと、すなわち作品の享受の際に讀者に與える影響の大きさにについても注意する。

第八節「技法論との關わり」は第四章のまとめ。ここまで見えてきた様々な媒體・様式が、いずれも創作の手法としての性格を有することを指摘し、これらが唐宋期までに成立した背景を考える。技法論が盛んに行われるようになった理由としては、詩や文を學ぶ對象とする意識が知識人に共有されるようになったこと、社會のあり方の變化によって創作に攜わる人々が増加したことを挙げ、これにともない技法に關する知識の習得に關する需要が増したという。

著者のいうように、文學論の需要を支えた人々がとりもなおさず書き手でもあったということは、古典中國の文學の場の大きな特質であろう。

第五章「文學論の占める位置」は、文學理論・批評が古典中國においてどのように位置づけられてきたかを様々な

角度・視點から考察する。

第一節「創作と批評・理論」は、創作の才に缺ける者がよく批評をなしうるか、いわゆる「眼高手低」をめぐる古今の議論を紹介する。後世の人々から、實作の才に乏しくその理論・批評に信を置けないとされた者の例として挙げられるのが、『文心雕龍』の劉勰、『詩品』の鍾嶸、『滄浪詩話』の嚴羽など、いずれも中國の數少ない體系的な理論・批評の書の著者なのは興味深い。本書がこうした事象の背景として、創作と理論が未分化であったことを指摘するのは首肯される。

この問題は視點を少し變えて、如何に作るかを知ることとそれを實踐すること、また如何に作るかを知ることとそれをことばにすること、などといった創作自體と創作の經緯・機微を言語化することの關係として捉え直すことができるだろう。これについては錢鍾書『管錘編』「全晉文」九七（「知與能」）、あるいは「知而能行與知而能言」が陸機「文賦」を材にして論じており、考究のヒントとなる。また同書には書法に關するものではあるが、衛夫人あるい

は王羲之の語と伝えられる「善鑑者不寫、善寫者不鑑」についての言及（『全晉文』二六）もある。

第二節「文學批評・理論と圖書分類」は、書籍目録における位置づけから、理論・批評に對する認識を見ようとするもの。文論書を収める最も古い書目、『隋書』經籍志では、アンソロジーの附録的扱いで總集の中に便宜的に入れられていたものが、唐・吳兢の自家藏書目『西齋書目』（散逸）に「文史」の目が設けられ、やがて北宋の『崇文總目』（および『唐書』藝文志）に「文史類」が備わり、書籍の一分類、學術の領域としての獨立性をしだいに確保しながら、傳統書目の集大成『四庫全書總目提要』の「詩文評類」に到る。この節では、史學批評の書『史通』についての書目上での歸屬について觸れ、あわせて「文史」の語の意味についても検討を加える。著者は、「文學書に屬するが實作ではない『文心雕龍』などと、史學を扱うが歴史書ではない『史通』」、これらの「〈文〉と〈史〉」を結合させた概念で兩者を一括したものが「文史」という分類・名稱の由來ではないかと述べる（一九七頁）。

書 評

この點については、『崇文總目』では『史通』が「文史」ではなく、史部・雜史類に入ること、すなわちその「文史」類が本書のいう「文と史」の「史」を缺いていることを見ると、やや問題があるかも知れない。内藤湖南「支那目錄學」（唐宋間に於ける子目の變化）は「文史」について、「集部の中で特別なことは、新唐書藝文志・崇文總目ともに、文史類が出来たことである。これは大體、批評學である。……これが目錄の最後の部類を占め、殊に新唐書藝文志では、これが何となしに目錄學の結論のやうな形をなしてゐる。事實この種類の本に、別錄・七略の精神が幾分残つてゐる。新唐書藝文志は、心あつて史通までもここに入れたかは分らぬが、ともかく文史類が最後を占めてゐるのは、當時、批評學が目錄の最後に來ることの必要が自然に感じられたのであらう」という。「文史」とは「文と史」ではなく「文の史」ではないか、すなわち「史」に、文學（史學を含む學術）の歴史的變遷や系譜の探源という「批評」意識の意味を持たせている可能性はないであろうか。もしそうであるならば、文論著述に「史」と

いうことばを與えたという意味で、「文史」類の誕生はより大きな意味をもつことになる。

第三節「文學」の位置」では、本書がこれまで論じてきた文學論・批評の位置からさらに「文學」そのものが、その擔い手である士大夫にとってどのような價值をもつものであったかについて考察する。まずは、辭賦の道を否定しつつ政治的な功業をこそ願うという曹植のことば「楊徳祖に與うる書」を引きつつ、士にとって「文學」があくまでも道德や政治に従屬するものであったことを述べる。

その一方、詩文の教養を身につけていることが士たるもの前提条件であったことを、他者の作品を自作と偽るある士人の逸事を引いて示す。士がすべて「文學」を身につけていることが前提であれば、自ずと專業としての「文學」、職業としての「文學者」は存在しえず、「文學」の「批評家」「理論家」も現れないこととなる。これを踏まえて議論は次節につながる。

第四節「批評の可能性」では、作品の正しい評價や理解はそもそも可能なのかについて、過去の中國の言説や、近

現代の文藝作品の實驗などにも目を配りつつ問題を提起する。一方、不完全な批評に對する非難の言表は、理想の解釋や批評への希望と表裏をなすものでもあると本書はいう。また「作詩」「評詩」「觀詩」「選詩」の困難を述べる發言を宋元期の著述から引き、こうした發言の露出に文學理論や批評の「自己主張」を見いだすとともに、ある意味で「文學」の周縁にあった理論・批評の特殊な位置づけに目をとめる。

第六章では、『易』の繫辭傳上の「書不盡言、言不盡意」を絲口にして、文學作品、そして文學理論・批評の根源にある言語そのものに關する議論の系譜をみる。まずは、言語は考え・思いを伝えうるかという議論について。次に、傳達の媒體としての言語と傳達される内容との輕重、すなわち「得意而忘言」にまつわる議論。また、言語表現の限界に對する認識を出發點にして、ことばによつて語り得ないものを表現するところに文學の目的を見いだす議論。「言」と「意」とのあいだに「象」なる要素を介在させ、さらに文學が生み出す現實を超えた世界「境」を想定する

ことなど、創作の營爲をめぐる考察の深化について概観する。著者は様々な言説を紹介しつつ、中國の人々は言語表現の可能性に對する信賴をつねに持ち續けてきたと述べる。

第七章「傳統の總括をめぐって」では、文學における「古典」のあり方、古典文學の條件について考察する。その第一の條件が文言の使用であることを述べたうえ、章の冒頭では、『莊子』にみえる孔子と老子のやりとりの一場面とそれを元にした魯迅『故事新編』『出關』の一節を挙げ、同じ内容を表す文言と白話を對比して見せる。

本書は古典中國における文學の大きな特徴として「古」の尊重を挙げる。「古」を尊ぶことを前提にしたとき、過去の中國の知識人たちは、文學のあり方の歴史的變遷をどのように理解し、どのように評價したか。過去をよしとすれば、自ずと現代に近づくにつれ、ものごとの價值は低くなる。これを如何に克服するかが後人の大きな課題となってくる。筆者はこれについて韓愈らの「復古」、黃庭堅の詩學をいうことばとしての「換骨」「奪胎」を挙げる。一方、清朝の滅亡が「古」の尊重と文言の使用という安定し

た文學環境の否定をもたらしたことを、胡適「文學改良芻議」によって示し、同時にまたその「芻議」自體が文言で表現されているところに、「古」の因襲の根深さを認める。

本書の最後、「〈古典〉と〈近代〉の間」では、王國維を取り上げる。「紅樓夢評論」では、小説世界を歴史的現象から切り離し、登場人物の中に人間存在の普遍的な要素を見ようとする王國維の姿勢を指摘。また『人間詞話』における「有我之境」「無我之境」からなる詞の分析と、詩詞の別を超えた文學的境地の追究を見ることによって、詞に詩とならぶ文學價值を認めた批評家としての見識に注目する。また『宋元戲曲考』の「一代に一代の文學有り」のこ とばを取り上げ、古典中國の歴史的變遷の中で生み出されてきた様々な文學様式を、雅俗を問わず評價する視點に着目する。「體」については後のものは前のものに敵わない、しかし「文學」そのものは、決してそのようなことはない、という『人間詞話』の一節を挙げ、ジャンルやスタイルを變えてもまた新しい力と魅力を發揮する「文學」の可能性を信じていたであろうと述べる。

中國の文學理論と批評に關する基本的情報を歴史に沿って網羅すると同時に、これらに關する諸問題を様々な角度から論じる本書は、情報量の豊富さと事象を考察する視點の鮮やかさがその特色であると思う。評者も、これまでに氣づくことのなかつた視點、知ることのなかつた資料を、本書によって教えてもらった。

事項の選擇や配置・配列、全體の構成に關して相當の工夫が凝らされているであろうことは、先に述べたとおりだ。本書の一部と二部の關係は、あたかも『文心雕龍』の前後各々二十五篇のそれをみるかのようにであり、一つの大きな主題を、二つの軸を通してみることによつて、古典中國における文學思潮の豐穰を多角的にとらえることができる。

文學に關する問題を考える契機、「古典中國」における文學の考究へとつながる絲口があちこちにちりばめられている。ことばと文學、創作と批評、内容と形式、「古」と「今」など、文學をめぐる問題、それを考察する種々のヒントを、大きな寶庫の扉を開いて示してくれる。本書をひもとくとき讀者は、著者とともに細やかに文を論じる喜び

を感じとることができるだろう。

文學研究という場合、作品や作家に關する研究が中心領域であり、理論や批評については、その周邊に位置するものと見なされることが多い。本書に導かれて「古代的文學理論」研究への關心が廣がるならば、中國の古典文學の研究はより充實することと思う。

文學研究に關する知的刺激とともに、わたしが個人的にもっとも感銘を受けたのは、「今」このときに、中國の「古」の文學を読むことの意味を著者が眞摯に考えていることが本書の隨處に感じとられたことだ。王國維の文學觀を考察する最後の章節を読み終えたとき、「古典中國における文學思潮」という本書の副題のもつ重みが、俄然胸に迫るようであつた。

(臨川書店、二〇一九年、本文二七七頁)